

『唐語使用』の会話文における語彙と語法

— 疑問、命令、依頼の表現を中心に —

日本江戸時代の“汉语课本”『唐語使用』会話部分的詞和語法

— 以疑問、命令、依頼等表現為主 —

奥村 佳代子

OKUMURA Kayoko

『唐語使用』は日本江戸時代の唐話資料之一。唐話は長崎唐通事用的一种現代漢語。當時的長崎是做為唯一的海外貿易的據點，允許中國人的來往。『唐語使用』の編著者岡島冠山出生在長崎，當時的長崎很容易接觸到異文化，他的唐話是在這樣的環境當中向唐通事和中國人學習培養起來的。

雖然在鎖國政策之下一般的日本人沒有和中國人用漢語說話的機會，但岡島冠山為一般的日本知識分子出版了四部唐話書。但是，他書中的唐話和唐通事的唐話並不一樣，這兩種唐話的區別反映使用者或學習者的唐話觀念。筆者認為通過分析語言可以知道日本知識分子的唐話觀念以及他們需要學習的內容。

本文通過分析『唐語使用』的疑問、命令、依頼等詞彙和分析語法考察它的特点。

キーワード

唐話、会話文、疑問、命令、依頼

1. はじめに

『唐語使用』は、岡島冠山（1674-1728）の編著書である。享保二十年（1735）に出版されたものが多いが、拙蔵の『唐語使用』は、弘化三年（1846）に出版されたものである。明治時代には藤懸永治編『雅俗清韓通語集』として、藤懸永治の序文を付し、京都の開益堂から明治二十八年に出版されたが、国会図書館近代ライブラリーのテキストによると、収録されている語句は『唐語使用』そのままである。出版年は享保から明治に至るまで出版を重ねているが、付されている序文はすべて次に挙げる積大潮による享保十年の序文である。

崎陽學一華音足矣學興冠山子唐話纂要出而學者好之不啻玄酒梁肉也後有唐譯便覽及唐音雅

俗語類學者謂天實生才哉即取道崎陽以爲標幟矣於是冠山子諄諄誨之猶姆師之教兒女輩夫學者稍稍就姆師請焉則東西趨之無不承其教頃者嗣有唐語使用凡六卷蓋中華所談日用言語具在視諸前之三部此其傑然者然要皆備之質訪而便于日用及茲書出四部成功譬猶四時成歲不可闕一焉且此所載而彼脫彼所遺而此備也則互其有無未始繁重耳乃茲書以盡唐語而唐語盡而盡之乎則吾知其日用之無盡矣是作唐語使用序

序文に述べられているように、『唐語使用』は岡島冠山によって記述、編纂された、第四冊目の唐話の書物である。『唐語使用』は、外題には「唐語」とあるが、各巻の最初には「唐話使用」と記されている。唐話とは、そもそもは長崎の唐通事が自らの中国語を呼びあわすために用いた名称であり、長崎における中国貿易に欠かせない言語であった。岡島冠山は、唐通事ではなく江戸や京坂など長崎を遠く離れた土地に住む日本人知識人を、読者として想定し、唐話という名称を冠した書物を初めて出版した人物である。荻生徂徠らが結成した訳社で講師を務めた人物でもあるが、それは唐話の才能を買われてのことであった。

岡島冠山は長崎の生まれであるとされるが、長崎での冠山については不明な点が多く、唐通事として唐話を話す機会があったのかは定かではない¹⁾。ただ、当時の長崎の状況を鑑みれば、唐通事ではなかったとしても唐話の知識を得る機会は十分にあったと考えられる。

長崎には唐人屋敷という、来航中国人が唯一滞在を許可された場所があった。唐人屋敷の敷地内には中国人が居住するための家屋や祠堂があり、広場では日用品や土産物を売る露店が出された。中国人は特別な行事がないかぎり、唐人屋敷を出ることは禁じられていた。一般の日本人の出入りは禁じられていたため、中国文化が凝集していた空間であったと言えるだろう。唐人屋敷が出来てからは、長崎の一般人にとっては中国人との接触はほとんどなくなり、中国語を聞いたり話したりする機会もなくなってしまうが、それ以前は、市中にごく普通に中国人がおり、長崎は日本人と中国人とが共存している土地であった²⁾。唐話に長けた日本人は内通事と称された私的な通訳を請け負うことも可能であった。岡島冠山は、中国人を祖先とする唐通事の家系の生まれではなかったため、唐通事としての足跡を辿ることは不可能かもしれないが、内通事であった可能性は否定できない。つまり、岡島冠山は唐話の知識を有しており、唐通事や中国人が話す唐話あるいは中国語を生で聞き、話していたと考えられるのである。

2. 巻一から巻三における疑問、反語、命令、依頼の表現

『唐語使用』には、漢字の右にカタカナで唐音が表記され、漢字には返り点と送り仮名が付され、唐話に続いてカタカナ交じり文で日本語訳が示されている。唐話、唐音、訓点、日本語訳という四点セットは、岡島冠山の唐話シリーズすべてに共通している。唐通事が唐通事のために編纂したテキストは、唐話の部分のみであり、発音や日本語訳は付されないことが普通であ

る。岡島冠山の唐話シリーズは、一般の日本人を読者として編纂されたために、発音や日本語訳を表示することに意味があり、歓迎されたのだろう。

『唐語使用』六卷六冊の構成は、次に示すとおりである。

卷一 二字ならびに四字の言葉

卷二 三字ならびに五字の言葉

卷三 六字と七字のつながりを持つ言葉

卷四 場面に応じた会話（字数の制限はなし）

卷五 場面に応じた会話（字数の制限はなし）

卷六 場面に応じた会話（字数の制限はなし）、長短雑話（字数制限なし）、器用

卷一から卷三までは文字数による分類である。文字数による分類は、岡島冠山の唐話シリーズの第一冊目である『唐話纂要』や、『唐音雅俗語類』の一部でも用いられている。二字の言葉から始まって、三字、四字……と徐々に文字数つまり音節数を増やしながら、言葉を身に付けていく学習法は、唐通事が実践した方法であった³⁾。

卷一から卷三の語はただ羅列されており、卷三を除いては相互のつながりが定かではなく、会話体として収められていると限定しがたい面がある。

そこで、唐話という語は本来唐通事の話し言葉を指す名称であることをよく踏まえていると見なし得る、話し相手が存在することを前提とした疑問や反語、命令、依頼、勧誘など、会話で用いられるべき表現を取り上げ、その語彙と語法を鳥瞰したいと思う。

『唐語使用』を資料として正確に引用するならば、唐話とともに記されている返り点や送り仮名、日本語訳もすべて挙げるべきであるが、ここでは便宜的に唐話のみを挙げることにする。なお、該当するものがあれば、それぞれ文字数ごとに各一文ずつ例文を挙げることを原則とする。卷三からの引用はつながりのある六字と七字をコンマで繋げて挙げる。

2-A. 疑問

(1) 疑問詞を用いる表現

① 疑問の対象が「物」

「何」 有何事 有何公事

「甚」 有甚忙

「甚麼」 等甚麼 你每做甚麼

② 疑問の対象が「人」

「誰」 誰能保無事

③ 疑問の対象が「数」

「多少」 多少錢賣 有多少里數

「幾」 有幾多路程

「幾時」 幾時去 你船幾時開

「幾何」 你尊庚幾何 種些善根也好,你老了能活幾何

④ 疑問の対象が「場所」

「那裡」 今日那裡去

「何處」 何處去 這船何處發 尊府在何處住,想必離此間不遠

⑤ 疑問の対象が「理由」

「怎」 你怎只管疑 你怎不告訴我,我若早知有論頭

「怎麼」 你怎麼來遲

「何」 緣何久不來 這乃一定之理,緣何你還自執迷

⑥ 疑問の対象が「方法、様子」

「怎麼」 怎麼處

「怎生」 怎生處

(2) 語気助詞を用いる表現

「麼」 近來有新奇事,列位也曾聽了麼

「否」 連日不拜尊顏,未審興居如意否

(3) 「麼」や「否」を伴わないもの

「未知」 未知興居好 以後多日不會,未知你怎生賞春

「不知」 不知貴恙好 他們迄今未到,不知有甚麼障礙

(4) 反復疑問 要不要 去不去 來不來 看不看

2-B. 反語

「那」 近來有所煩惱,那想還出去頑耍

「焉」 焉能說 焉能出我的氣

「豈」 豈不大惋惜 他們一路的人,豈可聽信他的話

「豈敢」 豈敢違負

「怎敢」 怎敢辭

「安」 你既受人之托,安得不爲他出力

「安敢」 安敢做 你不要錯怪我,我安敢說破老哥

「何必」 何必太生受 這般大冷天氣,何必你冒風遠來

「如何」 我每都經紀人,如何能作詩爲文

「何～哉」 功不成名不遂,有何面目處世哉

「難道」 今日雨霽天晴,你難道不去頑耍

2-C. 命令・依頼

(1) 動詞あるいは助動詞

- 「請」 請閑話 請你用便飯 請到樓閣上去, 納一黃昏涼也好
「要」 都要走開去 除要你親自去, 不然難以說服他
「須要」 須要勉力 須要用心些 須要省些用渡, 金銀不是容易有
「煩」 煩你教誨他 我今初到此間, 一切事煩你指教

(2) 副詞

- 「可」 今夜已有三更, 你可在這裡宿歇
「必須」 必須遵法度 我在這裡等你, 你必須立刻就來
「須」 須學正謹事 這些人做甚鬧, 你須趕他們出去
「千萬」 千萬靠賴你 起先所說的事, 千萬你替我體悉

(3) 否定詞を伴うもの

- 「不要」 不要慌 不要索價 不要寫得歪 你不要錯怪我, 我安敢說破老哥
「休要」 休要惱 休要放心于人, 恐被他背後所算
「不可」 不可造次 不可看得輕 不可花費錢鈔, 而今與往年不同
「不必」 不必說 不必多講 不必多講了
「不許」 夜裡不許出
「不消」 不消來
「不須」 不須問 不須你吩咐
「未可」 未可舉事
「休」 休多言 我去意已決了, 你休如此再三留
「莫」 莫教我等久
「勿」 勿忤我意

(4) 文末に助詞を置いたもの

- 「些」 留心些 只好家常些 何必只管生受, 只好家常些便了
「看」 想想看 查查看 比比看 打聽看
「着」 且耐心等着
「罷」 一起回去罷 今回若做不成, 這事寧撒開手罷
「便了」 今日天氣和暖, 我與你遊行便了 此去路程較遠, 索性早回去便了
「好了」 今日着實多興, 大家做詩也好了
「則個」 請斟酌則個 所托的那件事, 千萬你體悉則個

また、文末に「如何」を置くことによって勧誘を表しているものもある。

- 「如何」 晚上到我舍下, 喫一杯閑話如何

また、前置詞を用いて依頼を表しているものもある。

- 「替」 逐個個都要見,你替我請他們來
「爲」 謝不盡他的恩,你爲我好好說聲
「與」 你與我致意他,說我後日要望他

このように、巻一から巻三までには、疑問、反語、命令、依頼を表す語が数多く収められている⁴⁾。このことから、会話を意識していると言えるだろう。また、その語彙は、文言と口語あるいは白話のいずれもが用いられている。

3. 巻四から巻六の会話における疑問、反語、命令、依頼

他の「唐話辞書」と称されるものの中には意味で分類したものもあるが、岡島冠山の唐話シリーズは意味による分類ではなく、文字数による分類が基本であるといえるが、『唐語使用』に関しては、巻四から巻六にわたり、具体的な場面に分類したうえで「～説話」という形で表示し、二人の人物による一問一答の会話が収録されているという点が特徴である。すべて、片方の発言の後日本語訳を挿んで、もう片方の発言が「答～」で示される。

巻四から巻六の構成と内容を次に示す。最初に『唐語使用』に掲げられた場面名を、次に各場面の会話として収められている各やりとりにより筆者が番号を付し、その内容に関するキーワードを中国語で挙げている。

1. 初相見説話 ①久問大名②才名如雷③久慕高風④幸接尊顔⑤初蒙枉駕⑤天賜其便
2. 平日相會説話 ①問候②問候③托事④賞花⑤玩耍⑤問候⑦問候⑧可憐
3. 諸般謝人説話 ①宴會②宴會③訪問④幫忙⑤禮物⑤禮物⑦訪問⑧得職⑨昇進⑩昇進
⑩幫忙
4. 望人看顧説話 ①謝恩②謝恩③求幫忙
5. 諸般借貸説話 ①借錢②借錢③借錢④借書⑤借景
6. 諸般賀人説話 ①生日②結婚③結婚④結婚⑤生男孩兒⑥生男孩兒⑦生女兒⑧昇進
⑨搬家
7. 諸般諫勸人説話 ①勸喫藥②不要賭博③不要玩兒青樓④不要做壞事⑤不要求利
⑥要信道術⑦不要不善⑧勸積善⑨勸積善⑩勸積善
8. 諸般贊嘆人説話 ①學才②富貴③高潔④孝心⑤清貧⑥富貴⑦人品⑧學才⑨君子風格
⑩老師之教⑩人品⑩有本事
9. 書生相會説話 ①問候②看文章③今日的書生④借書⑤惜才⑥武家就文⑦稱讚學問
10. 與僧家相會説話 ①問候②問候③問候④願做佛⑤說職掌

次に、巻四から巻六に設けられたそれぞれの会話場面での疑問、反語、命令、依頼がどのような語彙で表されているかを見てみよう。

なお、唐話の後の日本語訳は原文に付されている日本語訳である。返り点、送り仮名は省略している。句点は、原文に基づいた上で、筆者が付した。

1. 「初相見説話」

初対面での会話六組が収められている。

疑問

「何」 何果如此厚款 何ユヘ此ノ如クコチソウナナレ候ヤ

反語

「何」 何足掛齒 何ンゾ云ニ足ンヤ

何當過譽 何ンゾ譽玉フニ當ニヤ

「豈」 豈敢違命 何ンゾ敢テ命ニ違ニヤ

豈意今日有縁 今日因縁アラントハ思ヒヨラズ

我等豈能企及 我等何ンゾ企及ンヤ

「安」 安謂今日相逢 今日逢候ハントハ思ヒヨラズ候フ

命令・依頼

「請勿」 請勿見弃 オステナサルベカラズ

請勿見厭 御アキナサルヘカラス

「願」 願領清誨請勿推故 願クハ教エヲ受ケ候ハン御辞退ナサレルナ

但願自今以後互相訪問。永結不變之好

願ハクハ今ヨリ以來ハ互ニオミマヒ申シテ永ク變セサルノ好ヲ結候ハン

あらたまった場面である初対面での挨拶は、どれも同じような普遍的かつ固定的な内容であり、語彙にも同様の傾向が見られる。

2. 「平日相會説話」

顔を合わせた際の日常的な会話八組が収められている。

疑問

「怎」 老爺帶我去看花怎推故

ダンナノ花ヲミニオツレナサル何ンゾヨクゴジタイ申サンヤ

「怎的」 却教我可憐你怎的 我汝ヲアハレント思フテ何かセン

「豈」 你豈不來問我一聲 汝ハ一声モ我ヲ問ハヌ

「未知」 這幾日少會。未知尊體康健 御康健ニ候フヤ

未知尊體如意 イカガコユウケンニ候フヤ

「不知」 敢問那件所托之事。不知怎生 彼ノタノミタルーツノコトハナントシタゾ

反語

- 「那」 那知果有貴恙 果シテゴビヤウキナリ
「什麼」 這是一定之理。悔什麼氣 是ハ定リタル道理ナリ
「何」 雖整日直宿。有何話說 毎日泊番致シ候フトモ何ノ云ブンカアラン
「豈」 豈敢好説 コレハコレハカカルギヲ仰セラル
小弟豈不知兄長愛恤 某何ンゾ貴公ノアハレミ玉フヲ知ラザランヤ
豈不是大悔氣 イマイマシキコトニ候ハズヤ

命令・依頼

- 「請」 只願用藥請自保重 ヒタスラ御藥ヲオモチイアリテ自ラゴタイセツニナサルベシ
請恕請恕 御ユルシクタサルヘシ
「不可」 這兩日天氣更冷。雖然略好。也不可見風
コノコロハ天氣モ殊外ヒエ候フ少シ御快ク候フトモ風ニフカレ玉フベカラズ
你自斟酌切不可驕矜忘本
汝自ラリヤウケンシテオゴリタカブリテ本ヲ忘ルベカラズ
「休」 休恠休恠 御恨ナサルマジ
「休要」 我曉得你原來懶走。休要又將推故 又ジタイイダサルベカラズ
「須」 你須同我去看一看 汝モ我ト同ク往テ見候へ
「便了」 仁兄再三勉強我着便了 貴公再三打候フヤウニ御シイナサレテ打シメ玉へ
「則個」 先生可憐小人則個 先生某ヲアハレトオボシメサルベシ
「千萬」 千萬你越與我計較 汝ヲタノムイヨイヨ我タメニケイリヤクセヨ
「願」 願足下與老夫拜覆令尊。容近日必當躬行奉謝
願ハクハ貴公某ガ為ニ御シンプサマニ近日ノ内自ラ伺候仕テ御礼申上ベキ由コデ
ンゴン御申クダサルベシ

日常的な出会いの場でのやりとりは、尋ねたり何らかの考えを述べたり命令する会話じたいが多い。また、内容も多岐にわたっており、語彙も文言的な語彙もあれば白話的な語彙も含まれている。なかでも、「則個」を特徴的な語彙として挙げることができる。なぜなら、唐通事の唐話テキストに見られない語彙だからである。『朱子語類』には用いられており、口語語彙であったと考えられるが、『唐語使用』が出版された十八世紀の口語を反映したものではありません。むしろ口語体を模した白話語彙が会話で用いられていると考えたほうが良いだろう。「則個」が用いられている会話は次のとおりである。日本語訳は省略する。

多謝先生枉駕。小人久失拜候。欠情不少。只是同僚道裏病人多。教我們不病的五六個人。或者代他當日。或者換他直宿。這幾日弄得我每晝夜慌忙。雖鐵石身軀也有些難熬。豈不是大悔氣。先生可憐小人則個。答。胡説。我曉得當日直宿。或者喫酒。或者下碁。自在遊樂。

恰如玩耍去一般。你們有這個職事。錢糧也不少。許多家口。安坐飽食。雖整日直宿有何話說。況且你身上有病。教同僚代你。同僚有病疾。你也該代他。這是一定之理。悔什麼氣。却教我可憐你怎的。你不是見那命不好的。或者精通武藝。或者善爲文章。各自負其才。而不能爲時用。未始一日快活。未始片刻安妥。此等之人真是可憐。你們才力也只是平常。因是命好。補着這個職事。得了這個錢糧。依我看起來。便是天大的造化。你自斟酌。切不可驕矜忘本。人可瞞天不可欺。小心小心。

上の引用は、仕事上の不平不満とそれに対する戒めの会話である。通り一遍の挨拶ではなく、個別的で具体的な内容が記されており、愚痴を言う方も戒める方も、ずけずけともの言っている。親しい間柄に限られる個別的な会話であると言えるだろう。「則個」という語は、当時の会話で用いられる語としては特殊であり、どのような場面でも用いることの可能な語ではなかった。『唐語使用』で個々の場面で限定的に用いられていることは、「則個」が通常は用いられない語であることを認識していたことの現われであると考えられるのではないだろうか。

3. 「諸般謝人說話」

感謝を述べる会話十一組が収められている。

反語

「何」 先生大才。何須我用言 先生ノ大才何ソゾ某トリナシニ及ビ候ハンヤ
何勝感佩 感心ノ至リニタエズ
何預爲之 何ノ預ルコトアラン

「何必」 何必如此致謝 何ソ此ノ如ク御礼仰セラレ候ヤ

「豈」 豈無奉疑之心 何ソゴチサウ申ノ心ナカランヤ
豈不惶愧 ハヅカシキ御事ニ候フ
豈不羞殺人。甚自不當 ハヅカシキコトニテイタミ入り候フ

「安」 小兒雖蠢。安不思重報 倅愚ナリト云ヘドモ何ソゾ重ク報ハンコトラ思ハザランヤ
命令・依頼

「不可」 切不可如此拘禮 カヤウニゴキウクツニハナザルマジ

感謝を述べる場面においても、初対面の会話と同じくあらたまった言葉遣いによる会話である。程度の甚だしさを強調するために、反語の表現が多く用いられていると考えられる。疑問や命令は用いられていない。

4. 「望人看顧說話」

便宜や世話を要求する会話三組が収められている。

疑問

「甚」 有甚難處 何ノカタキコト候ハンヤ

反語

「豈」 若知天命。豈以富貴貧賤介意哉 天命ヲ知ル者ハ何ンゾ富貴貧賤ヲ以テ心ニカケンヤ

「難道～不成」 難道教你喫虧不成 ナント老兄ニメイハク致サシメンヤ

命令、依頼

「請」 請休推故 ゴジタイナサルベカラズ

且請安心

「不可」 決不可煩惱 必ス御ナヤミアルベカラズ

「望」 專望老爹垂青。分些餘光 專ラ貴公ノ御目ヲカケクササレテ餘光ヲ分ケ玉フヲ望ム
萬望爲我做出一條安身立命之計

何トゾ我タメニ身ヲ安ンジ命ヲ立ルノ計コトヲナシ玉ヘ

収められている会話が少ないため用例も少ないが、便宜や世話を依頼する場合の表現には「望」が用いられている。

5. 「諸般借貸說話」

貸し借りに関する会話五組が収められている。

疑問

「甚麼」 這是甚麼話 何ノ言ゾ

反語

「那」 目今這時候。那家有這閑銀子借你使

今時此時分誰家ニ閑ノ銀ガアリテ汝ニ借シテ使ハシメンヤ

「豈」 豈敢推托 何ンゾ辭ジ候ハンヤ

「不是」 卻不是悔氣 イマイマシキコトニアラズヤ

命令・依頼

「請」 請免請免 御免御免

「休」 且休憂愁 先御ウレヒナサルベカラズ

「不可」 我不敢久留。來月初頭便有得還你。你不可不爽利

我久シクハ留オカジ來月ノ初二ハ返スコトアランイサギヨクセヨ

「要」 只要你來月初頭不失信便了 只來月ノ初メニブサタシ玉フナ

「可」 我想你家還是有這頭銀子。你可拿出來借我用

我思フニ汝ノ方ニハマダ此シキノ銀子アルベシ取出シテ我ニ借セ

「千萬」 千萬千萬 万タノミ上候フ

ここでは、口語語彙の使用が目立っている。上に挙げた「甚麼」「那」「不是」「不可」「要」

「可」は、次に挙げる会話に用いられている。

我今忽有不得已之事。急要三十兩銀子。這早晚各處去借。走遍了相與人家。只是半文也借不出。卻不是悔氣。我想你家還是有這頭銀子。你可拿出來借我用。我不敢久留。來月初頭便有得還你。你不可不爽利。答。你也好說。目今這時候。那家有這閑銀子。借你使。莫說三十兩三分錢也不是容易借得的。況且你借銀子。就如皇帝老爺借銀子一般。你可拿出來借我用。不可不爽利。這是甚麼話。我和你兄弟一般。便是這般說也不礙。若對別人家也說這樣大支支的話兒。不要想銀子借。卻先惹人叱罵。你豈不自省。你既料我家有。特地問我借我。也不宜說沒有。落得拿出來借你用。見得些我的爽利也好。只要你來月初頭。不失信便了。

上に挙げた引用は、金銭の貸し借りをめぐる会話である。借りる方の言い分を、貸す方が詰る内容は、非常に具体的であり個別的であると言えるだろう。

6. 「諸般賀人說話」

お祝いを述べる会話九組が収められている。

反語

「何」 何足言賀 何ンゾ賀スルニ足ンヤ
何足當賀 何ンゾ賀ニ當ルニ足り候ハンヤ
何足掛齒 何ンゾ云ニ足ンヤ
何特爲之枉駕。多勞多勞 何ンゾコレガ為ニ御出アルヤゴクラウヲカケ候フ
「豈」 豈望過分 何ンゾ分ニ過タルコトヲ望候ハンヤ

命令、依頼

「請」 請恕請恕 オンユルシクタサルベシ

「如何」 今日既蒙枉顧。獻杯村酒如何

今日已ニ御出ヲ蒙リシカパー盃ノ村酒ヲ進ラセタク候イカガアランヤ

お祝いを述べる会話のうち、八組までは子の誕生や昇進に関するものであり、普遍的な内容だと言えるが、九組目の引越しを祝う会話には具体的で個別的な内容が盛り込まれている。

聽道足下移居此處。今日特來奉賀。果然這個所在景致非凡。前河後山。夏涼冬暖。更兼園中花卉。皆奇皆異。假山已古。就如真的一般。正是市中僊界。欽羨欽羨。答。小弟初搬。還未修造。依舊蕪穢。今且勉強居住。只是前面的河。與後面的山。真乃現成景致。可以觀賞。餘外這些花卉假山。自是兒戲。今日既蒙枉顧。獻杯村酒如何。

7. 「諸般諫勸人説話」

諫め正しい道へと誘導する会話十組が収められている。

疑問

「何」 這は何謂 此ハ何トイタシタルコトニテ候ヤ

「不知」 不知有這般禍 何トシテ此禍ハアリタルニヤト存ジテ

反語

「誰」 誰知倒也利市起來 反テエトガヨクナリ

「什麼」 他曉得什麼道術 彼何の道術ヲカ知ラン

「那」 那料仁兄恰好來見教 思ヒ居ケル処ニ仁兄來リ玉ヒテ御教訓ヲナサル
那料被仁兄見責 思ヒヨラズシテ仁兄ニシカラレタリ

「豈」 豈自輕覷 何ンゾ自ラ輕ク看玉フヤ
豈不是可很 何ンゾクチオシキコトニアラズヤ

「怎」 既有良醫。怎敢不服藥 既ニ良医アラハ何ンゾ藥ヲ用イザランヤ
你怎直如此愚了 汝何ユヘ此銀ク具になりそう老父ヤ

「不是」 這不是天教我改失 是ハ天ヨリ我ニ過チヲ改メサセ玉フ者ナリ

「難道」 難道迷到這個田地 何ンゾ迷テ此場ニ至ルヤ

命令・依頼

「請」 請早邀良醫。求藥療治 早く名医ヲムカヘテ藥ヲ求メ御治療ナサルベシ
請免請免 御免シ御免シ

「莫」 莫怪莫怪 必スウラムコトナカレ

「不可」 決不可遷延自誤 延引シテ自ラアヤマリ玉フベカラズ
下次再不可去 重テハバクチニ出マジ
你須今日爲始。竟自割斷。再不可去走那條路

汝今日ヲ始メトシテフット思ヒキリ再彼筋ニ往クヘカラズ

切不可怨天尤人 天ヲモ人ヲモ怨候コトナカレ

「不要」 從此以後只要擇友相交。不要聽那幫閑們呆話

今ヨリ以後ハ友ヲ擇ラ交ハリタイコモチ等カ云フタハコトヲキクベカラズ

「要」 花言巧語。只顧奉承。要我賞他

言ヲ花カニシ語ヲ巧ニシテヒタスラニウヤマウテ我花ヲクレルコトヲ求ム

「須」 你須趁早悔心。改過自新 汝早く心ヲ悔テ過チヲ改メテ自ラ新タニナレ

「必須」 你也必須學古人的法兒 汝モ古人ノ法ヲマナベ

「便了」 明日必當請他來療治便了 明日必ス良医ヲ請シテ療治致スベシ

除非行仁慈 ゼヒゼヒ仁慈ヲ行ハルベシ

你自斟酌 汝自ラリヤウケンヲ致サルベシ

ここでの会話の内容は変化に富んでいる。たとえば、上に挙げた反語の「那」、命令の「不可」「不要」「要」の例文は遊郭通い、反語の「誰」の例文は賭け事、反語の「什麼」の例文は道術についての会話であり、さまざまな事柄に関して、個別的かつ具体的なやりとりが展開されている。

8. 「諸般讚嘆人説話」

賞賛の会話十二組が収められている。

疑問

「怎」 怎有如此高手段 何トシテ此ノ如キ高手段アリヤ
「怎生」 這是怎生 是ハ何トシタルコトゾ
如何有此般好心腸 何トシテサヤウノヨキハラハタハ持候ヤ

反語

「何」 何足掛齒 何ンゾ云ニ足ンヤ
何足齒及 何ンゾ云ニ足ンヤ
老夫有何德 當此過譽 老夫何ノ徳アリテ過キタル御誉ニ當ンヤ
「怎」 何況別人的閒是非怎能搬得起
況ヤ他人ノ是非ヲ何ンゾ能ク搬スコトヲ得候ハンヤ
「豈」 豈當仁兄過譽 何ンゾ仁兄ノ過キテ誉玉フニ當ンヤ
「安」 安敢自大 何ンゾ敢テ自ラ大ナリ
「焉」 焉能如此 何ンゾ能ク此ノ如クナランヤ

命令・依頼

「請」 足下請察 足下之ヲ察セ
請教請教 御示シ御示シ
「不可」 功名之事再不可題。倒得羞殺我了
功名ノコトハ再ヒ仰セキケラルマジ反テ我ヲハヅカシムルナリ
ここでは、文言的な語彙の使用が目立つと言えるだろう。

9. 「書生相會説話」

書生同士の会話七組が収められている。

疑問

「何」 仁兄你這幾日有何貴忙。詩會也不來
仁兄コノコロハ何ノオイソガシキコトアリテ詩會ニモ出玉ハヌヤ
何故太拘束 何ユヘ餘リキウクツニ致サンヤ
「不知～怎樣」 不知你意下如何 汝ノ心ハ如何

我等不知怎樣 我等ハ何トシタルコトニヤ

反語

「甚」 有甚嘴臉再見故人 何ノ面目アリテ再ヒ故人ニ見ヘンヤ

「何消」 何消定要禁 何ンゾ定テ禁セント欲スルニ及ハンヤ

「怎」 怎敢不愛護 何ンゾ大切ニセザランヤ

「豈」 豈可令他弃武 何ゾ武ヲ棄サシメ候ハンヤ
豈宜憊慢

「安」 安敢不謹學 何ゾ敢テ学ヲ勤メザランヤ

「不是」 不是多少好何 ホドカ宜キコトニアラズヤ

「難道」 武士難道不學文 ナント武士ハ文ヲ学ヒザルハズニテ候フヤ
難道自負此般大才。碌碌守貧不成

何ゾ自ラ此ノ如キ大才ヲ負テ碌碌トシテ貧ヲ守リ候ハンヤ

命令・依頼

「不可」 仁兄你不可自誤 自ラ誤リ玉フコトナカレ

「要」 還要請教仁兄 仁兄ニモ教ヲ請ハント存候フ

「須」 你須斟酌 汝リヤウケンヲ致サルベシ

「必須」 必須到江都去 必ス江都ニ往テイトナミヲナシ

「些」 我和你都是一般讀書中人。必當正謹些

我汝ト都テ是讀書中ノ人必ス正ンカルベキコトナリ

言的な語彙も口語も共に用いられている。ここでの会話にも、通り一遍の挨拶ではなく、話し手が武士であったり志を抱いて故郷を離れて来た者であったり、個別的な内容が見受けられる。

10. 「與僧家相會說話」

僧侶との会話五組が収められている。

疑問

「甚」 又要願做甚佛 又何ノ佛ニナラント願ヒ候フヤ

餘外還有管甚的職事 此外ニ何事ヲ管ル役人アリヤ

「麼」 令師堂頭老和尚康健麼

コシシャウ堂頭老和尚ニハゴユウケンニコザナサレ候フヤ

「未知～麼」 這幾日有事。久不來奉拜。未知法躰如意麼

コノコロハ用事アリテ久シクオミマヒ申上ズゴユウケンニコザナサレ候フヤ

「不知～怎生」 不知怎生修行。方能做得佛 如何ヤウノ修行ニテ能ク佛ニナリ候フヤ

反語

「那」 老僧做堂頭整整五年。今已七旬之上。那能管得起這許多事
老僧堂頭ニナリテチャウド五年ナニナリ候フ今已ニ七十二餘リ何トシテ此若干ノ
コトヲ掌リ候ハンヤ

命令・依頼

「請」 請恕請恕 御ユルシ御ユルシ

「望」 望師父與我致意老和尚說聲。近日必當奉候
師父我タメニオコトツテヲ仰上ラレ近日オミマヒ申上ベシト御申シクダサルベク
候フ
望大和尚指教 望ラクハ大和尚コレヲ教ヘ玉ヘ

ここでは、口語を用いている傾向にある。「那」の例を始めとして、具体的かつ個別的な内容が含まれている。

4. まとめ

『唐語使用』の会話における疑問、反語、命令、依頼の表現は、語彙の面においては、同じ一回の会話の中にも、文言と口語あるいは白話の混合が見られたが、初対面や感謝の挨拶では、文言や定型句が多く用いられているのに対し、より個人の事情に即した個別的かつ具体的な内容の会話には、口語あるいは白話が多く使用されていることを確認できた。

また、巻一から巻二に関しては場面の設定や前後の文脈が示されておらず、具体的にどのように使われるのかわかりにくい面がある。たとえば、巻二の「請用杯村酒」というお酒を勧めるセリフは、「諸般賀人説話」のお祝いに駆けつけた人へのお礼の言葉として「今日既蒙枉顧。獻杯村酒如何」と用いられているほうが、読む者に対してより生き生き伝わってくることだろう。巻三に関しては、六字と七字を結びつけることによって、どのように用いられるかある程度の推測が可能であると言えるが、巻四から巻六で十の場面に分類して明示したことによって、一般の日本人にとって唐話がより実用的な言葉として提示されたといえるだろう。

注

- 1) 『唐通事会所日録』（『大日本近世史料』所収）元禄十三年（1700）三月七日の記録の「岡島長左衛門」が冠山であるという確証はない。
- 2) 唐人屋敷は元禄二年（1689）に完成し運営が始まる。冠山十五、六歳の頃である。
- 3) 武藤長平著『西南文運史論』（岡書院、1926）。
- 4) また、ここでは特に取り上げないが、唐話だけを見ると相手に向かって話す言葉として収められているかどうかは定かではなくても、下に記された本語訳に命令あるいは依頼の用法であることがはっ

きりと示されているものもある。ほんの一例を挙げると、たとえば次のような語句がある。

這裡來 ココニキヨ

再坐坐頑耍 マットイテアソビ候へ

你且走將進去,看裡首有甚人在 汝ハ先ススミ入りテ内ニタレガイルカミヨ

主要参考文献

- 石崎又造著『近世日本に於ける支那俗語文学史』弘文堂書房 1940年
太田辰夫著『中国語歴史文法』江南書院 1958年(朋友書店 1981年)
宮田 安著『唐通事家系論攷』長崎文献社 1979年
山本紀綱著『長崎唐人屋敷』謙光社 1983年
林 陸朗著『長崎唐通事』吉川弘文館 2000年